

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：10102  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2013～2016  
課題番号：25370757  
研究課題名(和文) 下総国一宮香取社の神宮寺・寺院関係資料に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A study on the Buddhist side in Katori Shrine

## 研究代表者

鈴木 哲雄 (SUZUKI, tetsuo)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20374746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：香取神宮における仏教的な資料を多数収集し、鈴木哲雄「香取神宮の神宮寺・寺院関係資料一覧(稿)」(『史流』46号、2016年)として刊行した。また、収集した諸資料にもとづいて、香取神宮境内に存在した愛染堂や経堂(経蔵)のあり方、かつて経蔵にあった大蔵経の散佚と一部の伝来状況、神宮寺における正月修正会の幕末までの存続、七人の供僧体制や諸寺院の存在について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：A large number of Buddhist documents on Katori Shrine were collected and published. Also, according to the collected data, we clarified the characteristics of the Buddhist aspect of Katori Shrine.

研究分野：日本史

キーワード：一宮 香取社 香取神宮 廃仏毀釈 神宮寺 神社史研究

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、中世には下総国一宮であった香取神宮での廃仏毀釈以前の神仏習合的状况の概要を把握しようとするものである。

中近世の香取神宮及びその周辺には、香取神宮に係る多数の寺院が存在した。たとえば、嘉慶2年(1388)12月2日香取社神官死亡逃亡跡屋敷田畠目録などには、「追野寺、大応寺、安久寺、宝幢院、又見坊、経田、塔ノ下、追野権現堂、坊山、阿弥陀堂、別当、新寺、定額、八十八寺」や「アマタ堂、薬師堂」といった寺院名や地名が確認できる。また、天正19年(1591)10月の香取神領寺社配当帳などには、「別当・又見坊・根本寺・不断所・円寿院・護摩堂・新福寺・金剛宝寺」や「定額・新寺・追野分・神宮寺」などがみえる。年月日未詳の朱印配当小割帳写には、「又見、定額、不断所、円寿院、新寺、新寺畑分、追野分、神宮寺」が記載されているのである。

香取神宮の境内には、「愛染堂」や「経蔵(堂)」があったことが、元禄13年(1700)の香取神宮造営帳写や元禄13年度造営での棟札で確認することができるし、神宮寺(金剛宝寺)の本堂にあたる「観音堂(御本地堂とも)」と「三重塔」「鐘楼堂」「観音堂門」も再建あるいは修覆されたことがわかるのである。

久保木清淵「香取参詣記」(文政11年刊行)の挿絵である香取神宮境内図には愛染堂や経堂がはっきりと描かれており、「別当大神宮寺」の図には、観音堂門、鐘楼堂、本堂(観音堂)、三重塔が描かれ、左には「妙幢堂・法塔院・不断所」(法塔院は「宝幢院」か)と記されている。これが江戸後期の香取神宮および神宮寺の風景であった。

そこで本研究では、久保木清淵「香取参詣記」など江戸後期の地誌類の内容を確認しつつ、中近世の香取神宮周辺での神仏習合的状况を復元していくことにしたい。

すでに同様の試みは、高森良昌の「神仏分離 香取山・金剛宝寺の事例」や「香取大神宮寺・金剛宝寺考 神仏分離の実態」などが行っており、本研究が取り上げる諸資料も高森によってすでに紹介・検討されたものが多い。研究代表者の鈴木も権検非違使家本『香取神宮神幸祭絵巻』の検討から、中世の神宮寺や神輿に懸けられた御正体(懸仏)、香取神の本地仏(懸仏)にふれて、中世における神仏習合的状况にふれたことがある。

## 2. 研究の目的

本研究は、下総国一宮香取社における中・近世の神宮寺や関係寺院等の諸資料を蒐集・整理することで、中世一宮の本来的なあり方(境内の景観や周辺寺社とのネットワーク、神官・寺僧の組織、宗教儀礼、年中行事等)を解明しようとするものである。香取社の場合も、明治初年までの神仏分離、廃仏毀釈によって神宮寺などの諸資料の多くが遺

棄され散逸してしまったが、すべてが失われたわけではない。しかし、これまでの研究では、廃仏毀釈による神社諸資料の偏在ということが十分には自覚されていない面もあった。そこで本研究では、近世から幕末期の記録類にも目配りしつつ、神宮寺などの諸資料を蒐集することで、一宮研究や神社史研究の新たな方向性を見いだしたいと考えたわけである。

## 3. 研究の方法

香取社周辺の調査と千葉県外に流出したものの調査を行った。まずは、公表されている香取社の寺院関係資料の確認・蒐集の作業を行うとともに、香取市教育部生涯学習課文化財班などの協力を得つつ、新たに確認できる資料がないかを調査した。主な調査先は下記のとおりである。

・至徳3年の「下総州香取大神宮大鐘一口」の銘文のある梵鐘所蔵の神奈川県藤沢市羽鳥の御霊神社

・香取社本殿の懸仏を所蔵する千葉県香取市の観福寺及び神宮寺=金剛宝寺の本尊であった十一面観音像を所蔵する同じく香取市の荘厳寺、香取社境内の愛染堂の本尊であった愛染明王を所蔵する同香取市の惣持院など。

また、香取神宮周辺に多数存在する下総型板碑は中世香取社=神宮寺への信仰と深く関わるはずである。すでに、それらの銘文の多くは、『千葉県史料金石編二・三(補遺)』(千葉県、1978・80年)に収録されているが、それらの銘文の再確認などを行った。

日常的な作業としては、刊本資料集からの寺院関係資料の検索作業を実施した。香取社の年中行事についての関係資料も神仏習合の視点から理解されるべきものも多く、再検討を行った。

板碑の主要な確認調査場所は、市香取の新福寺墓地・惣持院跡・追野共同墓地等/香取市丁子の額応寺跡・円応寺跡・丁子共同墓地など/香取市多田の光明院など/香取市新市場の地藏院/香取市下小野の宝蔵院/香取市多田本田の分飯司堂跡/香取市津宮の久保木家墓地・龍性院跡・正法院跡・千仏堂などであった。

## 4. 研究成果

基本的な研究成果である鈴木哲雄「香取神宮の神宮寺・寺院関係資料一覧(稿)」(『史流』46号、2016年)にもとづいて、以下のような成果をあげることができた。

### (1) 香取神宮境内の愛染堂と経堂(経蔵)について

「香取参詣記」には、香取神宮本社の西方にあった愛染堂には、愛染明王が安置されており、社僧の夏経(げきょう)を勤める所、「香取私記」には「供僧の夏経法楽の処」とある。明治初年の廃仏毀釈によって、愛染堂は取り

壊されたが、本尊の「愛染明王」は惣持院に移され、現在は惣持院の本尊（秘仏）となっている。神宮境内の愛染堂は、社僧（供僧）の夏経の場であり、香取の神仏を讀経で法樂する境内寺院であった。

また、元禄13年度造営での遷宮儀礼に関わる記事によれば、遷宮の際には、香取神宮で相續されてきた神秘の祈禱が行われたのであり、その時に愛染堂は金剛宝寺（別当）が他の社僧を召し連れ着座する所であった。

経堂（経蔵）は、本社の後の神林の中にあつた。「香取参詣記」には、「建保年中、左兵衛尉平朝臣常重、宋版の一切経を納め、神宮へ法樂せし所なり」とある。その宋版一切経（大蔵経）は、今はことごとく散佚して数百巻ばかり残るが、それらは「当時神宮寺の預り」となっていたとあるが、「香取私記」には、「今は散佚して、此彼に一二巻ツツ残れり」としている。これによれば、経堂の宋版一切経（大蔵経）は、江戸後期には散逸して数百巻となり、神宮寺の預かりとなったが、その後文政11・12年までには、一、二巻となってしまったという意味であろう。その一、二巻も神宮寺を離れて現在は、「大般若経卷第七十」が成田仏教図書館に、「大智度論卷第六十」が国立歴史民俗博物館に所蔵されている。

なお、応永20年(1413)8月に、下総国守護の千葉兼胤が香取社に参詣した際に、「大般若御布施十結（銭十貫文）」が供僧中に施されており、兼胤の父満胤も応永5年(1398)の香取社造営時の遷宮の際に、「大般若御布施十結」を供僧中に与えている。室町時代には、大般若経は供僧の管轄下にあつたわけで、それに千葉氏当主が繰り返し布施をするのは、千葉氏と大般若経の特別な関係（大般若経は千葉氏の寄進によるもの）を意味しているのかもしれない。

後者の「大智度論卷第六十」は、もとは建長7年(1255)に鹿島社（鹿島神宮）に奉納されたものであつた。この奥書に継がれた「修補記」によれば、鹿島神宮から流出したこの一切経は、香取神宮の経堂あるいは神宮寺の什物となったが、安政3年には反故となり佐原で売り物となっていた。伊能景晴は、「香取神宮の本社の裏にあつた経蔵（経堂）内の仏経類は残らず紛失し、大別当金剛宝寺（神宮寺）にも仏経はもちろん古文書皆無であつた」と修補記に書いており、香取神宮周辺での「廢仏毀釈」は江戸後期から相当に進んでいたのである。

清宮利右衛門所蔵「香取文書」には、成田仏教図書館と国立歴史民俗博物館の所蔵されている二点の宋版一切経（大蔵経）を含む五点の大蔵経が写されている。収録順にみていくと、

「大智度論卷第六十」の奥書のみ

「道地経一卷 觀種章第一」の冒頭六行（新出）

「大般若経卷第一百三十三」の冒頭三

行（新出）

「大般若経卷第七十」の奥書のみ

「大般若経卷第五百七十」の奥書を含む巻末一紙分（上記新出）

となる。秀堅が書写した五点の宋版一切経・大般若経の一部や奥書の写は、もとは経堂にあり、その後神宮寺の預かるところとなった大蔵経であつたとみてよからう。

これによって、少なく六巻の大蔵経が幕末までは香取神宮周辺（鹿島神宮神官敦岡正文を含む）に残されていたのであり、そのうち一卷（奥書を含む巻末一紙のみ）が旧分飯司家に現蔵されているのである。

## （2）神宮寺と十一面観音像

神宮寺について「香取参詣記」は、宮中町の諸神塚の西にあり、門は宮中町に向かうしている。現在、香取神宮の本殿方向に南西から直接登ることができる坂道があるが、この坂道の途中から左右が神宮寺境内であり、本堂（観音堂）はほぼ現在の坂道の途中に位置し、東に向きに建てられていた。したがって、観音堂門は、現在の坂道が「雨乞塚」のところで小道と直交する付近にあつたと推定される。観音堂門の左手に「オクノミヤ（奥の宮）」とあり、参考にならう。三重塔は本堂の南西に位置しており、坂道途中の小字「とうの崎」は「(三重)塔の崎」であつたらう。

「香取参詣記」には、「香取山金剛宝寺と云、真言宗御朱印二十石、本堂の本尊は十一面観世音菩薩、長一丈六尺春日作、脇土に十二天を安置す」とある。「毎年正月八日より十四日まで観音修正供あり。十四日満会の夜は追儼とて、にきやかなる祭あり」としている。さらに、本堂の後の三重塔は、高さ8丈7尺8寸で、本尊は薬師如来、東照大権現の神牌を安置する。鐘楼は本堂の前にあり、古鐘は「至徳三年丙寅十月」の銘があるとしている。「香取私記」には、「密宗の僧侶の住て、神前の法樂を奉る寺なり」とある。

清宮秀堅の「下総国旧事考」には、「神宮寺八、言家(マ)ノ社僧、神前ノ法樂ヲ奉ル寺ナリ」とあり、建永2年(1207)の関白家前左大臣家政所下文に「当社大神宮寺仏聖燈油修理料田等」や「修正仏聖燈油修理料田等」とあることにふれて、

修正トイヘルハ、観音ノ修正会ニテ、今ニ怠慢ナク行ハレ、正月八日ヨリ十四日マデ、七日ノ修法アリ、満会ノ夜は、追儼ノ儀アリ。僧侶八、壇ニ登テ法供ヲ修シ、祠員八庭上ニ列位シ、祭事畢レバ、集会ノ祠員ヨリ始テ、群参ノ人、共ニ堂ノ（縁の木偏）板ヲ撃、鐘ヲ撞キ、邪氣ヲ驅除ストナリ。

と観音修正会について説明している。正月8日より14日までの7日間にわたる修法と満会での追儼の祭事は、修正会の一般的なものである。修正会では、神宮寺の社僧が、祭壇に登り修法し、祠員（神官）が庭上に参列。満会の夜に祭事が終了すると、集まった神官

から始まって、群れ参った多くの人々が、ともに本堂の縁板を打ち、鐘（鐘楼の至徳3年銘の古鐘であろう）を撞いて邪気を払ったというのである。そして、重要なことはこの「観音修正会」は、当時（秀堅の自序は弘化2年（1845））まで怠慢なく続けられていたとあることである。

明治維新以前の香取神宮での祭典・祭事については、伊藤泰歳による「維新前 年中祭典式稿」が詳しい記録を残している。これは奥書に「明治十七年三月」とあるもので、当時の禰宜伊藤泰歳が明治維新前における香取神宮の年中祭典の旧儀を調査して記したものであった。

泰歳が記した「修正会」の様子は、「下総国旧事考」の記事よりさらに詳しいものである。これによれば、正月8日夜から金剛宝寺（神宮寺）観音堂で行われた修正会では、初中後の3夜には大宮司・大禰宜以下の神官が出仕し、毎夜は金剛宝寺の六供僧と壇行事等が修法を執行した。8日早朝には、金剛宝寺（神宮寺）から壇行事に円鏡餅一重を持参させ、神官の分飯司に包丁と菜板で裁断させて、大宮司・大禰宜および十八奉行に配らせた。また、分飯司から修正会のための燧火具・香・散米等が出され、毎日中には撤去した「供饌」（供え物）を配与するために金剛宝寺の鐘を撞き知らせたという。

そして、14日夜の追儺には、大宮司・大禰宜以下の神官と金剛宝寺の六供僧と壇行事等が出仕し、各々が青木の枝をもって邪気払いをする。また、満会のこの日には、金剛宝寺から青木に挟んだ牛王宝印が、大宮司・大禰宜をはじめとする諸家に配付されたという。そして夜には、郷里の子どもたちが藤の木で観音堂の縁を打ったという。その音が鹿島浦云々とあるのは、香取神（仏）が本来は梶取神（舟人・漁民の神）であったことが表出したものというべきであろう。

神宮寺観音堂における修正会では、初日の8日早朝に神宮寺に供えられた鏡餅が下げられ、裁断されて大宮司・大禰宜および十八奉行に配られた。また毎日昼には祭壇から下げられた「供饌」（供え物）を配与するために金剛宝寺の鐘を撞き知らせたというが、その対象は「郷里」の人々であったろう。そして満会の十四日には、神宮寺から牛王宝印が諸家に配られたのであった。ちなみに、慶長4年（1599）3月7日物申祝起請文は香取の牛王宝印に書かれたものである。

中世の国家儀礼や年中行事について詳細に検討した井原今朝男によれば、修正会とは中世の正月行事で、国家儀礼として上は天皇・院・摂関家から下は荘園鎮守や村落寺社に至るまで同じ日に実施されることで、民衆統合の役割を果たしたものであるとしている。そして、「中世の修正会では壇供餅を公事として調進し一年間の安穏快樂の祈禱を行ったあと、共飲共食の饗応をうけ、除災招福の護符である牛王宝印を頂戴して在地に帰った」と

している。右で復元した江戸後期の香取神宮寺での正月修正会の諸行事は、井原が整理した修正会一般のあり方とほとんど同じものであり、すでに村落寺社的なものとなっている。しかし、建永2年10月日閑白家前左大臣家政所下文に載る「香取社大神宮寺修正」や「新寺観音堂修正」は、国一宮としての修正会であったと考えられるのである。

香取神宮の神宮寺において幕末まで行われていた修正会・追儺会の行事は中世以来のものであったことは間違いないのである。

本堂の本尊十一面観世音菩薩は、廃仏毀釈の難から辛うじて救われ、現在は香取市佐原の莊嚴寺に所蔵されている。頭部の十面は失われているが、堂々たる平安仏で、平安前期のものとしてされている。背面内部には、元禄13年度造営での修理銘が確認されているが、造営の際の棟札によれば、香取大神宮の本地仏十一面観音には、脇立として廿八部衆があったが、それはすべて失われている。脇立について、「香取参詣記」は「十二天」（前出）していたが誤りであろう。

本堂前の鐘楼にあった「至徳三年丙寅十月」銘の古鐘は、現在は神奈川県藤沢市鳥羽・御霊神社に所蔵されている。

なお、神宮寺の古文書については、清宮秀堅編纂「香取新誌」が、「香取文書」の総数は関東随一であるなどと説明するなかで、「神宮寺文書八、イサ、カノ金円ニテ、一二葉ヅ、他へ売却セシト云」と記していることも確認しておきたい。

さて、ここまで検討してきた神宮寺のあり方は、中世にまで確実にさかのぼるものである。以前に検討したように、図像としての神宮寺の中世的形態は権検非違使家本「香取神幸祭絵巻」にみることができる。ここに描かれた正神殿や神輿の形態は、文永8年（1271）の香取社造営注文の書き上げと多くが一致することが確認できている。ということは、同絵巻の神宮寺の図像も鎌倉時代のものでよいのである。そこには、「楼門二王堂」「塔」（三重塔）「神宮寺」（本堂）「鐘楼」が描かれており、それは江戸後期の観音堂門と三重塔、本堂、本堂前の鐘楼（立派な鐘楼堂ではないが）とほぼ同様と考えてよいのである。

また、同絵巻では、香取神宮の楼門を出た祭列は一鳥居、二鳥居を進み、神宮寺の正面「楼門二王堂」（神宮寺観音堂門）に突き当たるように描かれている。それは先に想定した東向きの神宮寺の境内と香取神宮の位置関係に対応するのである。

### （3）供僧と諸寺院

神宮寺（金剛宝寺）別当以下の供僧（社僧）は、七人を原則としたようである。たとえば、嘉暦2年（1327）10月日香取社机注文には、「供僧七人」とみえるし、正月元日に本殿前で行われる社官等の姓名の読み上げ（「司召」）では、寺別当・定額代・又見・不

断所・円寿院・神主供僧・読師などの七名(七寺)が原則であり、室町時代から江戸時代にかけて変化はなかった。

また、先にふれた神宮寺(金剛宝寺)での正月修正会に出仕したのも、「六供僧・壇行事」の七名であった。愛染堂での夏経に出仕した社僧(供僧)そして元禄13年度造営での遷宮に際して、愛染堂に着座した金剛宝寺(別当)以下の社僧も7名であったろう。そして「司召」での「読経所」とは愛染堂のことと考えられる。

16世紀末ころまでには、神官・社僧は大禰宜指南の者と神主(大宮司)指南の者に分かれており、供僧7人のうち5人(5寺)が大禰宜指南の者であり、供僧(社僧)の員数の外に惣持院以下5寺も配下にあるというわけである。

以上が下総国一宮香取社の神宮寺・寺院関係資料に関する基礎的な研究から復元することができた、香取神宮・神宮寺周辺の中近世の神仏習合的状况である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計6件)

鈴木哲雄、中世の荘園と村 かせ田荘絵図から、歴史地理教育、査読無、848号、2016、54-59

鈴木哲雄、書評 木村茂光著『日本中世百姓成立史論』、歴史学研究、査読無、942号、2016、46-49

鈴木哲雄、香取神宮の神宮寺・寺院関係資料一覧(稿)、史流、査読無、46号、2016、27-54

鈴木哲雄、絵巻物に描かれた水産資源と生業風景、季刊 考古学、査読無、128号、2014、86-88

鈴木哲雄 他、座談会：日本の論点・争点 御成敗式目四二条論、日本歴史、査読無、784巻、2013、2-23

鈴木哲雄、シリーズ「動乱の東国史」と歴史教育、歴史地理教育、査読無、803号、2013、64-65

#### 〔学会発表〕(計3件)

鈴木哲雄、香取神宮の神宮寺及び供僧についての基礎的考察、北海道教育大学史学会、2016年7月2日、北海道教育大学札幌駅前サテライト(札幌市)

鈴木哲雄、多文化教育としてのアイヌ文化学習、日本社会科教育学会、2015年11月8日、宮城教育大学(宮城県)

鈴木哲雄、日本の歴史教育の動向—加藤章著『戦後歴史教育史論』に学ぶ、日韓国際シンポジウム「日韓歴史共通教材の新たな地平と目指して」、2014年1月11

日、國學院大學(東京都)

#### 〔図書〕(計3件)

鈴木哲雄、岩田書院、社会科歴史教育論、2017、366

鈴木哲雄 他、岩田書院、中世東国の社会と文化、2016、334(285-306)

鈴木哲雄 他、岩波書店、岩波講座日本歴史第6巻(中世1)、2013、310(197-231)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

鈴木 哲雄 (SUZUKI, Tetsuo)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20374746

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者

( )